

51

古代日本におけるマスク文化発祥の歴史と 現在社会への影響

安細 敏弘, 高瀬万里子, 赤崎 優, 大南 裕樹,
桑原 良英, 竹原 直道

九州歯科大学 (※高瀬, 赤崎, 大南, 桑原は歯学部学生)

【はじめに】

2020年度はCOVID-19の感染予防対策としてマスクは日常生活に欠かせないツールの一つとなった。日本人においては昔からマスクをすることにそれほど抵抗感をもたないと言われている。その背景にはどのようなことがあるのだろうか。我々はそうした疑問をもった。マスクの歴史について堀井光俊氏の著書である「マスクの歴史」に詳しく書かれているが、近代以前のマスクの歴史については詳しい記述はみられない。そこで本研究では現代人のマスク着用習慣に影響を与えてきたと考えられる要因を明らかにすることを目的に古来からの生活習慣や信仰を中心に検証を試みたので報告する。

【対象と方法】

資料としてマスクと日本人(堀井光俊, 秀明出版会)のほか、ブラウザへのアクセスにより文献および各種記事を収集した。

【結果】

古代の習慣として顔や口元人目に晒さず「隠す」ことを美德とした文化や習慣がいくつか存在していたようである。こうした日本特有の「顔隠しの文化」の例をあげてみる。まずは覆面である。古来より日本では神事などにおいて、御神体や神饌に自分の息(穢れ)を吹きかけないように白い布か紙をマスクのように装着していた。奈良時代に律令神祇制度が確立したことを考えると、この頃にはすでに日本に口元を覆う文化は存在しており、日本では最古のマスクと呼べるかもしれない。毎日新聞記事(令和3年3月26日)によると、江戸時代の「万病療治所」の錦絵には手ぬぐいで口を覆った町人が表されているという。2つ目は雑面である。これは雅楽面のひとつとされ、舞楽の「蘇利古」「案摩」を舞う時に用いられていた。この面に描かれている模様の意味には諸説が存在するが、ひとつに神を表しているとする説がある。かつて日本には神の顔を見ると不幸になるため、顔は決して見てはならないという考えがあった。そのため、当時の絵巻には、神の顔は決して見えないよう描かれている。当時の人々は人面を隠した神々を祀り、顔を隠してこそ神仏を宿すと考えていたのだろう。

3つ目は扇子である。昔から日本では、特に女性が口元を隠して笑うことが上品な仕草とされ、平安時代の女性は、扇を使って口元や顔を隠していた。その頃の口元を不淨とする風習からその行為を行ったという可能性も考えられるが、当時の絵巻を見ても男性よりも女性に多い仕草であることから、女性ならではの上品な行為だったことがわかる。

このように日本人は、古来から顔を覆う文化を獲得してきたと考えられ、そうした背景からマスクになじんできたのかもしれない。2011年3月16日付けのロサンゼルスタイムズには「日本の薄くて白いセーフティー・ブランケット」といった文言で表現されているようにある種の精神的安定を担保するツールの一つでもあるのかもしれない。現代のマスクを使って他人に素の自分を晒したくないという感情や顔の表情を隠すといったいわゆる「だてマスク」文化にも影響しているかもしれない。

【結論】

日本人にとってはマスク着用には違和感をもたない理由の一つとして、古来から日本に伝わる顔を覆う文化が影響していることが示唆された。